

若返りの水・隠岐郡知夫村多沢

令和2年11月24日掲載予定

収録・解説・酒井 董美 ただよし イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/mhinwa/kancho_200812.html

語り手 小泉ハナさん(明治23年生まれ)
収録・昭和50年6月4日

あらすじ

とんと昔があったげな。じいさんとばあさんとあつたげな。じいさんが正月の若水を迎えに行こうと思った。「弁当ごせ」「ご飯がないから梅干し持ってけ」「梅干しばかりで食われつかの」「梅干しなめて水飲みや、それで腹がはつだけ、いいだけん」

じいさんが山へ行つたところ、石の間からいい水がちょろちょろ出ているので、「いい水だけん」と思って、梅干しなめては水飲みしたら、つい若くなつてしまつて、少しは心もしつかりしたげな。

「いでやめましょ。こがあ若あなつたらばばに叱られる」と思つて帰つたげな。

「ばあさんよ、戻つたわい」「どの野碌だ。私をばかにして」「ばあさん、じいだわ、ばあさん、ようと見い。これは主(のし)おまえ)がくれた

着物や前掛けを掛けとつたぞ」「本当に、ようと見たらじいさんだわ。おまえが若返つているから、そう言つたわ」「ばかが。こうこううでな。山の石の間から、いい水が出て、正月さんの譲り葉もそこにたくさんあるし、主もそこに行きて水飲みや若あなるけん」「こなじいさん、そんなら、私も行く」。

それからばあさんが喜んで、「われにも何つぞ入れてごせ」「おまえには、味噌で過ぎとつで」と、じいさんは味噌ばつかり入れてやつたげな。ばあさんが行つたところ、水の出るところへ着いて、「こにいい水が出たことよなあ」と思つて、味噌なめては水飲み、なめては水飲みした。それで止めればよかつたのに、ばあさんは欲張りだつたので、いやになるほど飲んで赤児になつてしまつて、水のほとりで、「オワン、オワン……」と泣いていたげな。

じいさんはばあさんがいつまでも帰つて来ないので、「いつまでも何しちよつた。もどつて来んだが」と迎えに行つたところが、そこで「オワン、オワン」と泣いているので、じい

解説

さんは自分の懐に入れて、「これがわしのカカツ兒(かかり兒)だ」と言いながら抱えて帰つたげな。

この話の戸籍を関敬吾博士の『日本昔話大成』を引用して紹介してみる。それは「本格昔話の新話型」として次のように登録されている。本格新——若返り水

- 1、爺(婆)が(a)泉の水(桃の汁)を飲んで、(b)神に祈願して若返る札をもらう。
- 2、婆が若返ろうとして水をのむ、または(b)札をのむ。
- 3、爺が探しに行く、と水(札)をのみすぎて赤子になつている。

主人公は若返りに成功するが、それを知った配偶者の方は、欲張つたために水などを飲み過ぎ、赤ん坊になつてしまう。

こうして見てみれば、この話はいわゆる隣の家の人が主人公を真似て失敗してしまふという「隣人型」の変形である。ということが分かるのである。

(元島根大学法文学部教授)